
《論文》

日英2言語の逆接のつなぎ語に関する一考察 —butと日本語の訳語の対応について—

西川 眞由美

要旨

本稿の目的は、小説というジャンルにおいて、英語の逆接のつなぎ語として最も使用頻度の高いbutとその日本語の訳語を取り上げ、両者の対応関係を明らかにすることである。butは文中、あるいは独立文の文頭で使用され、先行内容と後続内容をつなぐために用いられる。通例、独立文の文頭で用いられるbutは「しかし」「でも」「ところが」などの接続詞を用いて訳され、文中で用いられるbutは「～が」「～けど」「～のに」などの接続助詞が訳語として用いられる。しかしながら、文中で用いられるbutでも日本語では接続詞を用いて訳される例が、特に会話においては頻繁に観察される。

本稿では、*Harry Potter and the Philosopher's Stone*とその日本語翻訳版である『ハリーポッターと賢者の石』から、butとそれに対応する日本語の逆接の接続表現（接続詞と接続助詞）のサンプルを抽出し、butの訳語として使用される日本語の機能語とその出現頻度を分析する。それをふまえ、特に文中で用いられるbutがなぜ日本語では接続詞で訳される例が多いのかについて、文構造、情報の質と量、情報性、論理関係の明確さ、などの点から詳細に考察する。

1. はじめに

英語の逆接のつなぎ語として（言語使用域を問わず）最も使用頻度の高いbutは、通例文中で語と語、句と句、節と節をつなぐ等位接続詞として「P but Q」の形で用いられ、前件Pと後件Qの意味的対比を表すために用いられる(Lakoff 1971、Blakemore 1987、Schiffrin 1987他)。¹ (1)は『ジーニアス英和辞典第5版』(2014)における接続詞butの記述から関連する語義と用例を抜粋

したものである（本稿の論旨と直接関連する語義①③④⑤のみ取り上げ、それ以外の語義は省略する）。①が典型的な逆接の例で、前件Pから推測・予測される内容が後件Qで否認される場合である。③では、butは軽い前置きと主節をつなぐために用いられている。butは独立文の文頭に生起する用法も確立されており(Biber et al. 1999: 84 他)、④のように相手の発話を受けて返答するなど、より大きな談話の中での対比を表したり、⑤のように新しい話題を提示するなど談話の展開を促す役割も持つ(ジーニアス英和辞典第5版 2014、ウィズダム英和辞典第4版 2019、松尾・廣瀬・西川2015)。

- (1) ①[対立関係にある語・句・節・文を結合して]しかし、だが、けれども、ところが《◆前述の内容との対照・対比・差異を示す》|| The restaurant serves cheap but good food. そのレストランは安くておいしい料理を出す/ “Let’s have a drink.” “I’d like to, but I’m afraid I must be leaving.” 「一杯やろう」「そうしたいのだが、残念ながらもう行かないといけない」/ We waited a little longer, but nobody came. 私たちはもう少し待ったが、だれも来なかった。[略]
- ③a)[Excuse me, I’m sorryなどの後で]《◆依頼・感謝・警告などの前置きとして》|| Excuse me, but would you mind moving over a bit? すみませんが、少し席を詰めていただけますか/ I hate to admit it, but I’ve hired an investigator. 実は、私立探偵を雇ったのです/ I’m sorry, I wish I could, but thank you for asking. すみません、できればそうしたいのですが、でも、お誘いはありがたいと思っています。[略]
- ④[独立文の文頭で]いや、でも；おや、まあ 《◆相手の発言への反論・強い怒り・不同意・驚きなどを表す》|| “You should buy the house at once.” “But how? I don’t have any money.” 「すぐに家を買ったほうがいいよ」「でも、どうやって？ お金なんて全然ないよ」/[...] “I won’t be able to go with you.” “But you promised!” 「一緒に行けない」「でも、約束したじゃないか」
- ⑤[独立文の文頭で]ところで 《◆butに強い強勢を置き、それまでの話が完全に終わって新しい話題に入ることを表す》|| “Is this your car?” “No, it’s a rental.” “But (anyway,) can you tell me how to get there?” 「これは君の車か」「いや、レンタルだ」「ところでそこへの行き方を教えてくれないか」

(ジーニアス英和辞典第5版 2014: 291-292)

では、日本語でbutに相当するのはどのような言語表現になるのだろうか。butと言えば、「しかし」「けれども」「でも」のような接続詞がすぐに頭に浮かび、実際、(1)の①でも「しかし」「だが」「けれども」「ところが」といった接続詞が訳語として与えられている。しかしながら、用例の訳を見てもそれらの接続詞は使用されておらず、ほとんど「～が」という接続助詞を用いて訳されている。③の前置きの例でも、1例のみ接続詞の「でも」が使用されているだけで、あとは接続助詞を用いるか訳語無しで終わっている。一方、文頭に生起するbutの用法である④と⑤の

場合は、用例の訳では接続詞が用いられている。² 文中で用いられるbutは、日本語でも複文構造を構成するという点で共通点を持つ接続助詞との親和性が強いのだろうか。そして、独立文の文頭に生起するbutは、日本語においても同様に文頭に生起する接続詞との親和性が強いのだろうか。

本稿では、まずbutとそれに関連する日本語の接続詞、接続助詞に関して概説した後、実際にbutがどのような日本語の機能語と対応するのかについて、使用文脈に鑑みながら考察する。具体的には、文中に用いられるbutと独立文の文頭に用いられるbutに焦点を当て、日本語でそれぞれどのような訳語が当てられているのかに関し、小説「ハリーポッターと賢者の石」の英語のオリジナル版と日本語の翻訳版を使って詳細に調査・分析し、なぜ当該文脈においてその訳語が適切なのかを明らかにすることを目的とする。

なお、本稿ではbutと日本語の訳語の対応関係に注目し分析を進めることとし、個々の語彙項目の詳細な意味機能の違いについては考察の対象とはしない。

2. butと日本語の逆接の接続表現

逆接とは、概念レベルでは「矛盾」や「対立」のような論理関係を表すものであり、実体的なテキストにおいては前件と後件の間に存在する意味関係としてとらえられる。³ 本章では、英語で逆接を表す代表的な接続詞であるbutと、日本語でそれに相当する接続表現（接続詞と接続助詞）について、先行研究を参照しつつそれぞれ関連する用法や機能を概説する。

2.1 butの機能と用法

Lakoff (1971) では、文中に用いられる等位接続詞butに関し、対称的な「意味的対立 (semantic opposition)」と非対称的な「期待の否認(denial of expectation)」という2つの用法を持つとしている。(2)の例を見てみる。

(2) a. John is a Republican but he' s honest.

b. Susan is tall but Mary is short.

(Blakemore 1987: 125)

(2a)では、前件の「ジョンは共和党員だ」という命題内容から導き出される「ジョンは不誠実だ」という予測が、後件で否認されることをbutが示している。この用法では、後件で否認される想定は、前件の命題的意味だけでなく、前提や論理的結論、当該文脈から語用論的に導出される想定なども対象となる。(2b)では、前件の「スーザンは背が高い」と後件の「メアリーは背が低い」は、同じ命題的意味のレベルで対比的に表されている。

Blakemore(1987, 1989, 1992)は、文中で前件と後件をつなぐbutを談話連結詞(discourse connective)とし、ヒトのコミュニケーションにおける発話解釈の認知メカニズムを扱う語用論である関連性理論(relevance theory)の枠組みで分析している。それによると、butは、発話解釈において表示命題を構成する「概念形成(concept construction)」というより概念と概念をどのように解釈するかという「手続き(procedure)」をコード化するという形で関連性を有する言語項

目であるとする。具体的には、butは「P but Q」という認知構造の中で、「Qを解釈するにあたり、Pから導出される文脈想定を否認せよ」という手続きの意味(procedural meaning)をコード化し、話し手はこの指示を聞き手に与えることによって自らが意図した方向で聞き手が後件を解釈するよう導くものとしている。Blakemoreの考察では、howeverやneverthelessの場合と同様にbutの中核的意味を「Pの否認」とする一方で、(2b)のbutのように先行部分と後続部分においてそれぞれの命題が両立する場合は「対比」になるのだと述べるにとどまっている。つまり、butは談話内で他にも様々な意味機能を持っており、それらの用法を統一的に説明することは難しいというのである(武内・山崎 1994: 211)。さらに、Blakemoreのbutの考察は文中に生起し前件と後件を結びつけるbutの用法のみを想定しての分析であり、文頭に生起しより広い談話を解釈の認知スコープにとるbutについては考察の射程に入れていない。

Schiffrin(1987)は、談話分析の立場から談話標識(discourse marker)としてのbutを分析している。そして、命題内容面での意味関係を示すだけではなく、話し手と聞き手の相互行為から生み出される期待や予想への対比を示すことが基本的にbutの意味だとしている。さらに、話題転換などbutを用いることによって生じる談話の展開についても詳しく分析している。この意味で、Schiffrinのbutの分析は、文中に用いられる用法だけでなく文頭に生起するものも含め、butの広範囲の談話機能についても研究の対象としている。

認知意味論の枠組みで研究を行ったSweetser(1990: 100-111)は、文中に生起する等位接続詞のbutを取り上げ、それは内容領域、認識領域、会話領域という3つの領域のうち認識領域と会話領域において等位項の間に存在する「衝突(conflict)」を表すと述べている。認識領域における衝突は(2a)のようなものになるが、会話領域に関するものとして(3)を見てみる。

(3)(Please) look up that phone number – but don' t bother if it will take you more than a few minutes.
(Sweetser 1990: 142)

ここでの衝突は、前半部分と後半部分の2つの命令文で伝達される「提案」という言語行為を遂行する上で起こっている。つまり、前半の「電話番号を調べてほしい」という依頼の基本的な会話の正当性を後半の「(もし時間がかかりそうなら)しなくていい」という内容が否定しているというのである。Sweetserの分析は上記の2つの領域においてbutが展開する逆接の意味役割について非常に興味深い説明をしているが、文頭に生起するbutの意味役割については何も述べていない。

逆に、『英語談話標識用法辞典』(2015: 186-196)では、独立文の文頭に生起するbutのみを所謂「談話標識」とみなし、その意味役割が詳述されている。もともと文中で用いられ先行部分と後続部分との意味的な対比や、先行内容から導出される推論等に矛盾する内容を後続内容で示すために用いられていた等位接続詞のbutが、発展的に独立文の文頭に用いられるようになり、対比や期待の否認に加え、話題の転換や話し手の感情を表すことにより聞き手や読み手の解釈の方向性を示す談話標識として用いられるようになった。また、談話標識として使用されるbutは、独立

文の文頭に生起することにより、文中に生起するbutより大きな単位の談話をその認知スコープとして持つ。例えば、先行内容によって伝えられる命題的意味や含意、前提に加え、当該発話の状況を含むより広い文脈情報なども認知スコープに含まれる。butはこういった様々な視点を主節の内容に導入することにより、話題を展開させるなど複数の用法を有するようになったのである。

2.2 日本語の接続詞と接続助詞

逆接は論理的展開を表す接続表現の一つで、主に後続部分が先行部分から予測される結果に反することを示したり両者の間に存在する対立を表す言語項目であり、日本語では「しかし」「でも」「ところで」などの接続詞と「が」「けど」「のに」などの接続助詞が存在する（仁田 2012: 49）。

接続詞とは語形変化をせず、基本的には独立語として文頭に生起し、談話内で後続内容が先行内容とどのような関係にあるのかを示す品詞である。逆接の接続詞については、「けれど（も）」「しかし」「でも」「だけど」「それなのに」「ところが」などがあげられる（庵 他 2001: 462-481 他）。(4a)のように先行部分で予測された事態が後続部分で実現されないことを示す「反予測」の用法と(4b)のように先行部分と後続部分の「対比」を表す用法があるとされており、「しかし」「でも」「だけど」がその代表的な接続詞である（仁田 2012: 78）。

(4) a. 雨は一日中降り続いた。しかし、ダムの貯水量はあまり回復しなかった。⁴

b. 兄はサッカーや野球が好きだ。しかし、弟は家で静かに読書をするのが好きだ。

(*ibid.*)

「対比」の用法は、先行部と後続部の順番を入れ替えても文が成立する点で「反予測」の用法と異なる。これは前節で見たbutの「対比」と「期待の否認」の場合と全く同様である。

「しかし」「でも」「だけど」と異なり、「ところが」「それが」が用いられると、後続する内容が強い意外性を持つことが示される(仁田 2012: 80-81)。これは、(5a)に見られるように、「ところが」に後続する内容は話し手の予測や期待に反する結果を相手にとっての新情報として導入するからである。そのような使用上の制限により、話し手や書き手は「ところが」を使うことによって後続する事実をよりドラマチックかつ効果的に相手に伝えることが可能になる。一方で、モノログで話し手や書き手が自分の知っていることを物語のように伝えていく(5b)のような場合にも用いることは可能である。

(5) a. その料理はとてもおいしかった。ところが、山本は半分ぐらい食べてあとは残してしま
った。カロリーオーバーだからだ。

b. 大会に出るために、1年間ずっと厳しい練習を続けてきました。ところが、私はケガで
出場できなくなってしまったんです。

(*ibid.*)

「それなのに」「そのわりに」「そのくせ」も、逆接の、特に反予測の文脈で用いられるが、話し手や書き手の非難や不満の気持ちを込めて用いられることが多いとされている(*ibid.*)。「それなのに」は、後続するのが事実のみであるという点で「ところが」と同じだが、「ところが」の場合はその事実は話し手や書き手のみが知っており、聞き手や読み手にとっては新情報である点で異なる。

接続助詞は、複文構造の中で先行節の最後に生起し、前後の意味的内容を示す付属語との一種である。⁵ 逆接の接続助詞は、先行部分によって予測される因果関係が後続部分で成立しないことを示すもので、大きく「けど」類、「のに」類、「ても」類の3つに分けられる(庵他 2001: 424)。庵他(2001)によると、「けど」類には、「～が」「～ものの」「～とはいえ」などが含まれ、(6a)のように事実を対比させた客観的な逆接関係を表す。これに対し、「のに」類は、(6b)で明らかのように、先行節の内容から予想される内容が後続節で否認されることに対する不満や意外さなどを表すため、どちらかといえば主観的な逆接関係を表す。

(6) a. 彼は野球は上手だが、バスケットは下手だ。

b. 彼は野球は上手なのに、バスケットは下手だ。(庵他 2001: 431)

「ても」類には、「～にせよ」「～にしたって」なども含まれ、(7)のように前件の内容が起こるかどうかわからないような、いわば仮定的な状況で使用され「仮定的逆接」とされている(庵他 2001: 435)。

(7) 田中さんが説明しても、彼は納得しないだろう。

さらに、「～けれど」「～が」は、主節と対立する内容の等位節に用いられ、(8)のように「対比」、「逆接」、「譲歩」、「前置き」の用法を持つ(仁田 2011: 257)。

(8) a. 欧米の大学は、入るのは簡単だが、出るのがむずかしい。(対比)

b. 先生にも聞いてみたけど、わからなかった。(逆接)

c. 掃除は行き届いていなかったけど、いい民宿だった。(譲歩)

d. 顔色が悪いけど、どうかしたの？(前置き)

等位節とは、従属節が主節に従属・依存することなく、意味的に対等の関係にある節のことである(仁田 2011: 7)。中でも「対比」が基本的な用法とされ、「逆接」は従属節の内容から予測される内容が主節の内容と対立することで表される。「譲歩」は、従属節が主節で述べる判断・評価とは逆方向の内容であることを示し、それを認めたくて主節の内容を主張する用法である。「前置き」の場合は、従属節で述べられたことは本来言いたいこと、つまり本題ではないという点で、主節との対立を表すものである(仁田 2011: 259- 261)。このように等位節で用いられる接続助詞

の意味役割は、文中に用いられるbutの意味機能とも関連し、その対応関係は非常に興味深いものであると考えられる。

以上、接続詞は後続文の文頭に用いて「後続内容が先行内容とどのような関係があるのか」を明示することでこれから導入する内容の解釈への方向性を示すことに焦点が当てられているのに対し、接続助詞は先行節の末尾で用いられ「先行内容が後続内容とどのような関係にあるのか」という前後の意味関係を示すことに重点が置かれている点で、それぞれの接続の仕方が異なるのである（仁田 2012: 53 他）。

3. 日英2言語の逆接に関する調査と分析

本章では、英語の小説のオリジナル版におけるbutと日本語の翻訳本における訳語とその出現数を手作業で抽出し、両者がどのように対応し、どのような関係が存在しているのかについてまとめる。

3.1 調査対象

本稿では、逆接のつなぎ語表現のサンプルを取るための対象として、*Harry Potter and Philosopher's Stone*とその日本語の翻訳本である『ハリーポッターと賢者の石』を選んだ。これらを選択した理由は、①地の文と会話文の両方がある程度の分量で存在していること、②一つの物語の中の全く同じ文脈における日英2言語のつなぎ語の比較が可能になること、③世界中の広い世代の人々に読まれており、いずれもわかりやすい文章で書かれていること、である。つなぎ語の考察においては常に何と何をつないでいるのかを理解する必要があり、そのため文脈は非常に重要となる。特に、先行内容と後続内容の間に存在する逆接の意味関係を読み取るためには、語と語、句と句、節と節、文と文、それらを超えた談話、また言語文脈のみならず、状況などの言語外の文脈情報への正確な理解が必要となる。その意味で、文脈がたどりやすい物語文で、かつ全く同じ文脈で考察できるということは大きなメリットと考えられる。なお、イディオム化されている用法（not~but、not only~but (also)、 anything but~など）の例は今回の調査対象から除外することとする。

3.2 調査方法と結果

英語版からbutのサンプルを、また翻訳本からそれらに対応する接続詞と接続助詞（または他の語い項目）のサンプルを手作業で抽出した。分析のポイントとしては、まず、「地の文」と「発話」の2種類に分けて、各項目の出現数を比較した。さらに、butの用法において、文中で用いられる場合と独立文の文頭で用いられる場合に分け、各項目の出現数を比較した。その上で、それぞれの場合にどのような日本語の逆接の接続表現が訳語として用いられているかについて、出現頻度を調べつつ比較した。逆接の接続表現以外の接続表現が使用されている場合は「その他」、訳語が無い場合は「訳語無し」とした。調査結果は表1のとおりである。

表1 英語オリジナル本と日本語翻訳本における butと日本語の訳語の対応（語彙項目と出現数）

	地の文		発話		合計
	文頭	文中	文頭	文中	
しかし	8	12	0	6	26
でも	2	14	37	24	77
だけど	0	1	8	5	14
だが	4	3	7	7	21
が	1	5	0	0	6
ところが	3	3	2	0	8
それなのに	0	1	0	1	2
それにしても	0	1	0	1	2
それでも	1	3	0	0	4
～が	2	114	0	19	135
～けど	0	4	0	13	17
～のに	0	6	0	0	6
その他	1	24	2	1	28
訳語無し	19	46	7	16	88
合計	41	237	63	93	434

(単位：例)

英語版では、butは地の文で278例、発話では156例、合計434例が使用されていた。地の文と発話の分量を考えると、地の文が圧倒的に多い中で、butは発話において特に頻繁に用いられていることが分かる。⁶ 次に、butの生起位置に関しては、地の文の278例中、文中生起が237例に対し文頭生起は41例で、圧倒的に文中で用いられることが多いことが分かる。一方、発話においては、156例中文中生起が93例に対して文頭生起は63例であり、文頭生起も全体の約40%を占めていることが分かる。地の文と比べ発話においては、冒頭で後続発話が先行発話（文脈）とどのような関係にあるかを聞き手に明示しておくことがコミュニケーションをより円滑かつ効果的に行えるからではないかと考えられる。

さらに、接続詞と接続助詞が文頭のbutと文中のbutのそれぞれの用法でどの程度使用されているのかを表2にまとめた。文頭に用いられるbutが接続助詞で訳される場合は2例にとどまり、ほとんど全ての文頭生起のbutは接続詞で訳されていることが分かった。一方で、文中で用いられるbutの場合、もちろん多いのは接続助詞で156例存在するが、接続詞で訳されている例も87例と約半数にのぼった。

表2 接続詞と接続助詞を用いて訳される例 (butの用法別)

	接続詞 160	接続助詞 158
文頭のbut 75	73 (地の文 19) (発話 54)	2 (地の文 2) (発話 0)
文中のbut 243	87 (地の文 43) (発話 44)	156 (地の文 124) (発話 32)

(単位：例)

4. 考察

本章では、第3章の調査結果をふまえ、英語のbutと日本語の訳語について、文頭・文中それぞれの用法における対応と関係性について考察する。

4.1 butと日本語の訳語の対応

日本語の訳語として用いられている接続詞は、「しかし」「でも」「だけど」「だが」「が」「ところが」「それなのに」「それにしても」「それでも」の9項目であった。一方、接続助詞は「～が」「～けど」「～のに」の3項目にとどまった。それぞれについて、詳細に見ていく。

まず、接続詞の例から見ていく。434例のbutに対し、接続詞が訳語として用いられているのは160例である。「でも」が77例と一番多く、「しかし」26例、「だが」21例、「だけど」14例、と続いた。地の文では62例の接続詞が訳語として使用されており、最も多いのは「しかし」の20例、次いで「でも」16例、「だが」7例、「ところが」と「が」が6例、「それでも」4例、「だけど」「それなのに」「それにしても」がそれぞれ1例となっている。発話では、接続詞が訳語として用いられているのは98例があり、「でも」が61例と圧倒的に多く、「だが」14例、「だけど」13例、「しかし」6例、「ところが」2例、「それなのに」と「それにしても」がそれぞれ1例である。butの生起位置で見ると、文頭で最も多く見られるのは「でも」の39例で、他を圧倒している。文中でも同様に「でも」が38例で、「しかし」18例、「だが」10例、「だけど」6例、「が」5例と続く。

接続助詞が訳語として用いられている例は158例で、接続詞160例とほぼ同数であった。項目としては「～が」「～けど」「～のに」のみで、「～が」が135例とそのほとんどを占め、「～けど」が17例、「～のに」6例となった。地の文で接続助詞が使用されているのは158例中126例、発話の32例と比べると出現頻度はほぼ4倍である。butの生起位置で見ると、文頭のbutに接続助詞が訳語として用いられているのは地の文の文頭に現れた2例のみで、他は全て文中生起のbutの訳語として使用されている。

4.2 独立文の文頭に用いられるbutと接続詞の対応

独立文の文頭で用いられるbutは、ほとんど全てが日本語では接続詞を用いて訳されていた。これは、書きことば・話しことばにかかわらず、文頭に生起することで、後に続く内容が先行す

る内容とどのような関係を持ち、どのように解釈すべきかを示す、所謂「談話標識」としての機能を持つからだと考えられる。^{7,8} Schourup(1999: 233)が談話標識の特徴の一つとして initiality を挙げているように、後続内容の解釈をより確実に行わせるためには、文頭という位置に生起して解釈に関わる文脈にある程度制限をかけることは解釈を行う上で非常に効果的であるからだと考えられる。

一方で、(9)と(10)の2例のみ接続助詞が用いられている例があった。いずれの例においても、先行内容の情報量が後続内容に比べ格段に軽いことが、あえて接続助詞で文をつなぐ原因になっているのではないかと考えられる。特に(10)については、先行内容のほとんどが発話の部分になり、地の文は「～とハリーが言った」という部分だけである。

- (9) マントの中をせわしげに何かをガサゴソ探していたが、誰かの視線に気づいたらしく、ふっと顔を上げ、通りの向こうからこちらの様子をじっとうかがっている猫を見つけた。(p. 16)
- (10) 「君にはわからないことだけど、これは、とっても重要なことなんだ」とハリーが言ったが、ネビルは必死に頑張り、譲ろうとしなかった。(p. 399)

4.3 文中で用いられるbutと日本語の訳語

第1章では、butの日本語の訳語を考えると、文頭のbutには接続詞、文中のbutには接続助詞が訳語として用いられる傾向があることを述べた。しかしながら、調査の結果から、前者は確かにその通りだが、後者は必ずしもそうではないことが分かった。つまり、文中に用いられるbutが日本語では接続詞で訳されている場合も相当数観察されるのである。本節では、なぜこのようなことが起こるのかについて、前章での調査結果をもとに丁寧に考察していく。

A. 発話での頻度の高さ

文中で用いられているbutの訳語として接続詞と接続助詞が用いられているのは243例であった。内訳は、接続詞が87例、接続助詞が156例である。まず、接続詞について言語使用域別に見ると、地の文では43例、発話で44例と、大きな差はなかった。一方で、接続助詞で訳されているのは、156例のうち地の文で124例、発話で32例である。このことから、接続詞が訳語として用いられる頻度は発話のほうが圧倒的に高いということになる。発話においては、文中生起のbutが接続詞に訳される例は全体の半分に及んだ。なぜ、文中に用いられるbutが接続詞で訳されることが発話で多いのだろうか。それは、発話は音の連鎖で瞬時に消えていくものなので、話し手は重要な内容を自分が意図したとおりに聞き手に解釈させるためには、その冒頭で明確な指示を与えることが効果的だからだと考える。(11)(12)を見てみる。

- (11) 「何もあれの心根がまっすぐじゃないなんて申しませんが」マクゴナガル先生はしぶしぶ認めた。「でもご存じのように、うっかりしているでしょう。[略]」(p. 25)

(12)「そ、そりゃ……俺もずっと飼っておけんぐらいのことはわかっどる。だけんどほっぽり出すなんてことはできん。どうしてもできん」(p. 346)

これらの発話における「でも」「(だ)け(ん)ど」の役割は、後続内容が先行内容から予測される想定に反することを冒頭で示しておくことにある。特に(11)では、接続助詞の「～が」を使った上で、さらに「でも」という接続詞を改めて用いている。つまり、先行節の末尾で後続節との意味関係を明示しておきながら、後続発話の冒頭でもあらためて会話の方向性を明確化、強化することで意図された通りに後続発話を解釈させるように聞き手を導いているのである。所謂「談話標識」とみなされるこのような言語項目は、それが無くても解釈は可能かもしれないが、特に話しことばにおいては、このようなデバイスを使用することでより解釈の正確さを担保し、円滑で効果的なコミュニケーションを可能にするのである。

B. 先行文と後続文の構造的側面

先行内容と後続内容の文構造が比較的長く複雑な場合、翻訳版ではいったん文を閉じた後、改めて接続詞を用いて文を作り直す場合が多い。(13)を見てみる。

(13) [ハリーは次々と試してみた。一体オリバー老人は何を期待しているのかさっぱりわからない。]⁹ 試し終わった杖の山が古い椅子の上にだんだん高く積み上げられてゆく。それなのに、柵から新しい杖を下すたびに、老人はますます嬉しそうな顔をした。(p. 128)

(13)の場合、先行内容と後続内容の両方が複文構造を長めの文構造を持っている。このような場合には、先行内容と後続内容を2文に分け、接続詞でつなぐ方が読み手の解釈にかかる認知的な処理コストを軽減し、理解しやすいものになると考えられる。

逆に、(14)～(17)のように前後が短めの内容だと、接続助詞で訳されることが多い。

(14)「[試験のようなものだと思う。] すごく痛ってフレッドは言ってたけど、きっと冗談だ。」(p. 171)

(15)マルフォイはせせら笑おうとしたが、顔がこわばっていた。(p. 220)

(16) [僕は退学になるんだ。わかってる。] 弁解したかったが、どういうわけか声が出ない。(p. 221)

(17) [ハリーのすぐ上で何か金色のものが光っていた。スニッチだ!] 捕まえようとしたが、腕がとても重い。(p. 435)

特に(16)や(17)のように、先行内容と後続内容が短いだけでなく、「逆接」という論理関係自体も弱い場合はなおさら、接続助詞を用いて意味関係を明確にすることに重点を置く方が解釈において有効と考えられる。

C. 情報の量と質

当該文脈において、先行内容と後続内容が持つ情報の重要性も、接続詞か接続助詞かの選択をする上で大きな判断基準になると考えられる。第1章や第2章で見たきたように、butには「期待の否認」、「対比」、「前置き」、「話題の転換」などの用法があるとされている。文中で用いられるbutが接続詞を用いて訳されている例を用法別にまとめると表3のようになった。

表3 文中に用いられるbutが接続詞を用いて訳される例（用法別）

	地の文	発話
期待の否認	41	38
対比	0	0
前置き	0	1
話題の転換	2	5

(単位：例)

まず、ほとんどの例が「期待の否認」という意味機能を示すために用いられている。「対比」の例は皆無だった。¹⁰ 「話題の転換」は、ほぼ独立文の文頭に生起するbutの役割であり、文中に生起するbutでは起こりにくいと考えられるが、地の文で2例と発話で5例、計7例が見られた。発話では「前置き」の例も1例見られた。

文中に用いられるbutが接続詞を用いて訳される意味機能のほとんどを占める「期待の否認」の例について情報量の点から考察する。(18)～(20)を見てみる。

(18) 小さかった頃、ハリーは誰か見知らぬ親戚が自分を迎えにやってくることを何度も何度も夢見た。しかし、そんなことは一度も起こらなかった。ダーズリー一家しか家族はなかった。

(p. 48)

(19) 一番年上らしい男の子がプラットホームの「9」と「10」に向かって進んでいった。ハリーは目を凝らして見ていた。見過ごさないよう、瞬きしないように気がつけた……ところが、男の子がちょうど二本のプラットホームの分かれ目にさしかかった時、ハリーの前にワンサカと旅行者の群れが溢れてきて、その最後のリュックサックが消えたころには、男の子も消え去っていた。(p. 139)

(20) 「お黙り！ダドリーのお古をわざわざおまえのために灰色に染めてあげてるんだ。仕上がればちゃんとした制服になるよ」とうていそうは思えなかった。でもハリーはなににも言わないほうがいいと思った。(p. 52)

(18)では、「しかし」がつなぐ後続内容の領域は2文にわたる。(19)と(20)では、「ところが」と「でも」がつなぐ先行内容の領域は3文となる。このような大量の情報を認知スコープに取る場

合は、文を切って接続詞でつなぎ直し、後続内容の冒頭で先行内容との意味的關係を明示することによって、解釈の方向性を指示する方が解釈にかかる認知的な処理コストが低くなり読み手は理解しやすいのだと考えられる。

一方、「期待の否認」の場合であっても情報量が少ない場合は接続助詞が用いられる傾向が強い。(21)(22)は比較的短い文構造を持った2文が接続助詞で結ばれている。

(21)これだけは絶対やりたくなかったが、他に手段があるだろうか？(p. 256)

(22)ハリーは鏡の中で見たものを忘れたと思ったが、そう簡単にはいかなかった。(p. 314)

次に情報の質の面から2言語のつなぎ語の対応を考えてみる。情報の質的重要性という意味で考えると、先行内容も後続内容もしっかり相手に伝えておきたい主たるテーマを持つ場合は接続詞が用いられる傾向が強いと考えられる。(23)～(25)を見てみる。

(23)すでに誰かがそこにいた。しかしそれはスネイプではなかった。ヴォルデモートでさえもなかった。(p. 422)

(24)「敵に向かっていくのに大いなる勇気がある。しかし、味方の友人に立ち向かっていくのにも同じくらいの勇気が必要じゃ。[略]」(p. 451)

(25)ロンの妹のジニー・ウィーズリーだった。が、指さしているのはロンではなかった。(p. 454)

いずれの例でも先行内容自体はそれほど情報量が多いわけではないが、物語の流れを理解する上でしっかり把握しておくべき重要な内容であることは明らかである。

逆に、特に先行内容が構造的には複文ではあるが、物語の中での重要性が比較的低いものは接続助詞でつながれる場合が多い。(26)～(28)については、メインテーマは明らかに後続内容にあり、先行内容はその解釈を助ける背景知識として記述されているに過ぎない。

(26)新聞を読む間は邪魔されたくないものだとすることを、バーノンおじさんから学んではいたが、黙っているのは辛かった。(p. 99)

(27)『名前を言ってはいけないあの人』もある意味では偉大なことをしたわけじゃ……恐ろしいことじゃったが、偉大には違いない」(p. 130)

(28)スリザリンについてあれこれ聞かされていたので、ハリーの思い込みかもしれないが、この寮の連中はどうも感じが悪いとハリーは思った。(p. 178)

情報の量と質がともに小さい典型例が、先行内容が「前置き」として用いられる場合で、“Excuse me, but…”や“I’m sorry, but…”などが挙げられる。しかしながら、翻訳版では(29)～(31)に見られるように、接続表現を用いないで訳される例が比較的多かった(ここでは参考のためオリジナル版の英語も記す)。

- (29) a. “Scuse me, but is one of you Mr. H. Potter? Only I got about an ’ undred of these at the front desk.” (p. 36)
 b. 「ごめんなさいまし。ハリーポッターという人はいなさるかね？今しがた、フロントにこれとおんなじもんがざっと百ほど届いたがね。」(p. 65)
- (30) a. “Sorry,” said Harry, “but what’ s curious?” (p. 65)
 b. 「あのう。何がそんなに不思議なんですか」とハリーが聞いた。(p. 129)
- (31) a. “Sorry,” he said. “but have you seen a toad at all?” (p. 78)
 b. 「ごめんね。僕のヒキガエルを見かけなかった？」(p. 156)

一方で、情報性においては特に重要ではない先行内容が来る所謂「前置き」のような場合でも接続詞が用いられる場合がある。それは、相手を不快にするなど心理的な負担を負わせる懸念があるような発話が後続する時で、そのような気持ちが無いことをしっかり相手に伝えておくために使用されるのである。(32)では、後続内容の「相手がチェスが上手くない」という内容により相手の気持ちを損なう恐れがある。つまり、相手との良い社会的関係の維持に関わる重要な局面においては、相手を思いやる配慮を明確に打ち出すために、接続詞が使用されているのだと考えられる。

- (32) 「気を悪くしないでくれよ。でも二人ともチェスはあまり上手じゃないから……」
 (p. 413)

D. 情報性 (旧情報か新情報か)

先行内容と後続内容の両方、あるいは片方が新情報か旧情報かということも、日本語の訳語の選択に大きく関わってくる。例えば、(33)のように先行内容と後続内容の両方が新情報である場合は、接続詞でつながれる場合が多いと考えられる。逆に、(34)のように先行内容が旧情報の場合は話し手と聞き手、あるいは書き手と読み手の間ですでに共有されている情報であることから情報価値が下がり、接続助詞でつながれる傾向が強くなる。

- (33) [それから先生は机を豚に変え、また元の姿に戻してみせた。] 生徒たちは感激して、早く試したくてウズウズした。しかし、家具を動物に変えるようになるまでには、まだまだ時間がかかることがすぐわかった。(p. 199)
- (34) 「一つ買わにゃならんが、まずは金をとってこんとな」とハグリッドが言った。(p. 109)

E. 逆接関係の明確さ

先行内容と後続内容の間に存在する意味的關係という観点から考えると、「逆接」という論理關係が明確であればあるほど接続詞の使用が多くなる傾向が見られる。(35)と(36)の例では、先行内容も後続内容もそれほど長いわけではない。しかしながら、両方とも前後の論理的な意味關係が非常に明確な例である。(35)では、「誰もいない」という先行命題と、後続する「ドアが開いている」から推論によって導出される「誰かがいる」という命題の間には明らかな矛盾の關係が存在する。同様に(36)においても、「誰かを助ける」という命題から導き出される「良いことをする」という内容は後続する「いけないこと」に全く相反する内容である。

(35) [クイレルの足音が聞こえなくなるのを待って、ハリーは教室をのぞいた。] 誰もいない。だが、反対側のドアが少し開いたままになっていた。(p. 361)

(36) 「フィレンツェは僕を助けてくれた。だけどそれはいけないことだったんだ.....[略]」
(p. 381)

一方で、(37)のような明確な論理關係が見当たらないもの、つまりかなり間接的にその關係が伝達されるような場合には、接続助詞でつながれる傾向が強い。

(37) 「そーれ、着いたぞ、小僧。九番線と.....ほれ、十番線だ。おまえのプラットフォームはその中間らしいが、まだできてないようだな、え？」(p. 137)

また、(38)~(40)に見られるように、何らかのyes/no疑問文の返答に続く場合は、返答自体の情的重要性が高いので、文をいったん切って、改めて接続詞で結び直す傾向が強くなる。

(38) 「飛んで来た」「飛んで?」「そうだ.....だが、帰り道はこの船だな。おまえさんを連れ出したから、もう魔法は使えないことになるとる」(p. 98)

(39) ハリーは前髪を掻き上げて稲妻の傷跡を見せた。ロンはじーっと見た。「それじゃ、これが『例のあの人』の.....?」「うん。でも、何にも覚えてないんだ」(p. 149)

(40) 「バカ呼ばわりするな!もうこれ以上規則を破ってはいけない!恐れずに立ち向かえと言ったのは君じゃないか」

「ああ、そうだ。でも立ち向かう相手は僕たちじゃない」(p. 400)

F. 新しい話題の提示

butが「話題の転換」の意味機能を持つ場合は後続文の文頭で用いられることが多いが、時に文中で用いられることもある。そして、その際には日本語では「だが」「しかし」「それにしても」などの接続詞を用いて訳される場合が多く見られた。

(41)「いつも罪のないものが真っ先に犠牲になる。大昔からずっとそうだった。そして今もなお……」

「ああ。だがロナン、何か見なかったか？いつもと違う何かを？」(p. 371)

(42) 妹の話がチラッとでも出ると、あれはいつも取り乱す。無理もない。もし自分の妹があんなふうだったら……それにしても、一体あのマントを着た連中は……(p. 10)

進行中の話題を切り上げ、新しい別の話題を導入することは、たとえそれがある程度関連する話題であったとしても、聞き手や読み手にとっては解釈に大きな負荷をかけることになる。このような場合には、接続詞を用いることによって、聞き手に新しい話題を導入することをあらかじめ知らせ、その解釈に向けての準備をさせることが伝達を成功させるのに必要であるからだと考えられる。

5. おわりに

本稿では、小説の英語オリジナル本と日本語の翻訳本を用い、英語のbutがどのように日本語の逆接を表すつなぎ語と対応しているか、またそこにはどのような関係性が存在しているのかについて考察した。

butといえば、日本語では「しかし」「でも」「ところが」などの接続詞を用いて訳されるのが当たり前だと思っていたが、実際には「～が」「～けど」「～のに」などの接続助詞も多く用いられていることが今回の調査で明らかになった。独立文の文頭に生起するbutは接続詞で訳されることが多く、それは、所謂「談話標識」として、後続発話を導入する前に先行内容との意味的關係を示すことで解釈の範囲を絞り、そうすることで認知的な処理コストを軽減するという役割を有するからだと考えられる。一方、文中で用いられるbutは、複文構造の中で前件と後件をつなぐ役割を持つという意味で、日本語では接続助詞と共通するところが多い。しかしながら、そのようなbutでも日本語で接続詞を用いて訳されることが、特に発話においては頻繁に観察され、そこにどのような理由があるのかを6つの基準に基づいて考察した。

本研究から、談話におけるbutの役割は（日本語の接続詞と接続助詞の両方にまたがるような）広範囲の文脈をカバーする豊かなものであるということが分かった。一方、日本語では接続詞と接続助詞という2つの品詞に加え、そのそれぞれに複数の類義語を持っているので、豊かな語彙の中で逆接を示すつなぎ語表現も文脈に応じて様ざまに使い分けられていることが分かった。もともと文中に生起し、前件と後件の間に存在する矛盾・対立という論理關係を示すbutは、日本語では複文構造における等位節において同様の役割を持つ接続助詞との関連性が非常に深い。また、独立文の文頭のbutは、文構造における生起位置において日本語の接続詞に相当し、その意味で所謂「談話標識」としての機能を持つという点で共通するところが多い。しかしながら、文中で用いられるbutも、等位接続詞として後続節の冒頭に位置することからその解釈過程における指示役割という点ではやはり後続内容への志向が強い。従って日本語では接続詞を訳語に持つ例が相当数存在することになるのだと考えられる。またその点で、従属節の末尾に位置し、どちら

かといえは先行内容への志向が強い接続助詞とは若干異なる役割を持つのであろう。本研究の成果は、文中のbutでも日本語では接続詞を用いて訳されることが多いという事実のみならず、近年多くの研究者が文中のbutと文頭のbutの両方を「談話標識」とみなす傾向にあることに関しても、妥当な説明が可能になるものと考ええる。

最後に、本稿では『ハリーポッターと賢者の石』という小説を分析の対象としたが、このような物語文においては文体的な側面も談話のつなぎ方に大きく関連していると考えられる。これについては、改めて今後の考察にゆだねることとしたい。

注

- ¹ butの頻度について、コーパス調査に基づいた英語の文法書であるBiber(1999: 79)では、butは(中核的な意味として)対比を表す主たる接続詞であるとしている。
- ² ⑤は新しい話題を展開するときで使用されるbutで、日本語において話題転換を表す典型的な接続詞である「ところで」が訳語として与えられている。一方、基本的に逆接の接続詞である「しかし」「でも」も話題転換の場面で使用される(浜田 1995: 202-203、加藤 2009: 72-74など)。例えば、(43)の係長の発話における「しかし」は、明らかに先行する話題から離れて新しい話題を提示していると考えられる。
- (43) 係員「係長、報告書、直しました。」
係長「ああ、直ってるね。しかし、相変わらず汚い字だな。」 (加藤 2009: 72)
- これらは全く無関係な話題ではなく、談話の大きな方向性の中で関連する別の視点からの話題(メタ的なものを含む)の提示であると分析されており、加藤(2009: 72-74)は、これも「しかし」などが持つ広義の「対比」の一種であると述べている。
- ³ 逆接については、概念レベルの論理関係と言語レベルにおける品詞等の範疇は検討すべき重要な問題ではあるが、論旨から外れた議論となるためこれ以上立ち入ることはしない。本稿では、どのレベルでも「逆接と関連付けて解釈されるもの」から逸脱しないものであれば統一的に「逆接」と呼ぶこととする。
- ⁴ 例文中の下線は筆者によるものである。以下同様とする。
- ⁵ 複文とは、述語を「2つ以上もつ文」(仁田 2011: 3)で、主節とその従属節を有する。従属節は中に現れる要素の制約によって主節への従属度の程度は4段階に分けられる(仁田 2011: 7-11 参照)。
- ⁶ Biber (1999: 82) には、butはすべての言語使用域の中で会話においてより頻度が高い唯一の接続詞であると記されている。
- ⁷ 加藤(2009: 58)では、逆接を照応現象の一つとみなして考察した接続詞「しかし」に関する論考の中で、「機能論的に見るのであれば、接続詞と呼ばれてきたものの多くは、談話標識とみなすべきだと考えている。談話標識のうち、前件と後件の関係を示す機能を持つものは接続詞とみなすべき属性を持っているが、その場合も、前件との照応の度合いなどを反映して、接続詞としての属性の強さが変わりうる」という見解を述べている。
- ⁸ 「談話標識」という用語は統一された理論的定義を持たないが、例えば加藤(2009: 63)では、談話標識の機能を、「①先行する発話との論理関係を表すもの、②導入される発話の種類を先取りして示すもの、③発話の確信度や認識の在り方などを予告する機能を持つもの(モーダルな要素)、④知識管理に関する理解などを示したり確認したりする機能を有するもの、⑤発話に注意を向けさせる機能を持つもの、⑥非自己発話(相手の発話)の受容の在り方について予告する機能を持つもの」の、6つに分類している。また、廣瀬・松尾・西川(2022: 19)では、談話標識の本質を『談話標識』とは、話し手が主に伝達しようとする発話メッセージ[命題内容]の周辺に位置し、聞き手がその内容を正しく理解するように意味解釈の仕方を合図する標識である。そして、その意味解釈の仕方を合図するにあたり、文脈に応じ、話し手の態度表明・感情表出、情報価値、談話構造、対人関係等に聞き手の意識を向けさせる言語表現である。」とまとめている。
- ⁹ 接続詞によって接続される内容に直接関係しないが、意味関係を解釈するために必要な言語文脈については[]を使って記入している。以下同様とする。
- ¹⁰ これは、「対比」の表現自体が「期待の否認」と比べて本物語では少ないこと、また明確な「対比」の場合の訳語としては「一方で」「それに対して」など、純粋な逆接ではない接続表現が使用されている可能性が高いからだと考えられる。

参考文献:

- Biber, D., S. Johansson, Leech G., Conrad S & Finegan, E. 1999. *Longman grammar of spoken and written English*. New York: Longman.
- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.

- Blakemore, D. 1989. Denial and contrast; a relevance theoretic analysis of *but*. *Linguistics and Philosophy*. 12, 15-38.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell. (『ヒトは発話をどう理解するか：関連性理論入門』1994. 武内道子・山崎英一訳. 東京：ひつじ書房)
- 浜田麻里. 1995. 「トコロガとシカシ」. 『世界の日本語教育』5 国際交流基金日本語国際センター.
- 庵功雄 他. 2001. 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 東京：スリーエーネットワーク.
- 加藤重弘. 2009. 「照応現象としてみた逆接：「しかし」の用法を中心に」. 『富山大学人文学部紀要』(50), 305-320. 富山大学人文学部.
- Lakoff, R. 1971. *If's, and but's about Conjunction*. In C. J. Fillmore & D. T. Langendoes(Eds.). *Studies in Linguistic Semantics*. New York: Holt, Reinhart and Winston.
- 前田直子. 1993. 「ケレデモ・ガとノニとテモ」. 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下)』. 東京：くろしお出版.
- 松尾文子・廣瀬浩三・西川眞由美. 2015. 『英語談話標識用法辞典—43の基本ディスコース・マーカー』. 東京：研究社.
- 廣瀬浩三・松尾文子・西川眞由美. 2022. 『英語談話標識の姿』. 東京：ひつじ書房.
- 仁田義雄 他. 2011. 『現代日本語文法6』. 東京：くろしお出版.
- 仁田義雄 他. 2012. 『現代日本語文法7』. 東京：くろしお出版.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. CUP.
- Schourup, L. 1999. Discourse Markers. *Language* 107, 227-265.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. CUP.
- 高橋太郎 他. 2005. 『日本語の文法』. 東京：ひつじ書房.

英和辞典:

- ジーニアス英和辞典第5版. 2014. 東京：大修館書店.
- ウィズダム英和辞典第4版. 2019. 東京：研究社.

引用文献:

- Rowling, L. K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury.
- J.K. ローリング. (松岡祐子訳). 2000. 『ハリー・ポッターと賢者の石』. 東京: 静山社.

Abstract:

The purpose of this study is to clarify the correspondence and relationship between the English inverse conjunction *but* and the equivalent words in Japanese. To collect samples of the equivalent of *but* and Japanese counterparts, I use *Harry Potter and the Philosopher's Stone* and its Japanese translation.

But is used to connect leading and subsequent contents in two ways: in a sentence and at the beginning of an independent sentence. In Japanese translations, the *but* at the beginning of a sentence is usually corresponded to a conjunction such as *shikashi*, *demo* and *tokoroga*, and the *but* in a sentence is a conjunctive particle such as *ga*, *kedo* and *noni*. However, it has been found that even in the latter case, it may be translated with conjunctions. Especially in conversation, it is often translated with a conjunction.

In this paper, I will make an attempt to explain why *but* in a sentence is translated as a Japanese conjunction from the several viewpoints: sentence structure before and after *but*, quality and quantity of information before and after *but*, informativeness (whether it is new or old information) and clarity of logical relationship.

(西川眞由美 摂南大学)